

【小出】 これは正に、文明論や民族論の話ですね。たとえば、明治時代にステイトという英語を翻訳した時に国家と訳すわけです。普通の近代国家というのは、個人が集まって国ができる、日本では何故か家という集団が集まって国ができるという発想なのですが。戸籍法というものは、韓国と日本にしか世界ではないのですが、集団として人生記録をとらえるわけです。それは、本当は日本の文化的伝統というか、その集団の素晴らしさというものがよくあると思うのですが、同時に個の埋没というのでしょうか、誰かがやってくれるだろうとか、諸刃の剣みたいな所があります。ですから、これをいきなり欧米型に個の確立という事で、若い世代はそれを自分勝手というのと間違えてしまうという混乱現象が今すごくあると思うのです。これをどう日本的な個の確立といいますか、そのストライクゾーンができるかというのは、この社会の根っここの部分になるところで、それがまさにマニュアルとか、他人のせいとかじゃなくて危機にあたっての事故の判断力というのが、一番重要な根っこになると思うのですね。竹村先生、いよいよ日本社会の特質と言いますか、安全というので、私は心配しているのは、少子化というのは現在1.20か1.25くらいですか。限りなく日本社会は一人っ子に近づいてきて、将来、一人っ子と一人っ子が結婚するとその間にできた子どもには叔父さん、伯母さん、従兄弟がいないわけです。兄弟もいない。そういうことは日本から親類ネットワークが絶滅するわけです。日本社会というのはコアの部分には親類ネットワークでまず集団が出来て、それで災害に対する知恵とか身体で覚える知識というのは、ほとんど親類ネットワークで、おじいちゃんとか従兄弟とかいうので小さいうちに身につけるのです。身体の知識というのはいったん覚えたら死ぬまで忘れないものだから。それも教育の場がすでに圧倒的に劇的になくなっているわけです。そういう中での安全をどう確保するか。竹村先生が先ほど言われたゾーンとして守るというのは当然必然的にコミュニティというものの存在がないとなかなか機能しないと思うのですが。そういう少子化による親類ネットワークの消滅、それから個人情報保護法のようなくぐらな法律によるコミュニティの崩壊。これはプライバシーというはお互いのプライバシーのカードを切

りあって接近するわけです、恋人同士でもプライバシーのカードを切りあって、ある程度のプライバシーを知り合わなければ、コミュニティは成立しないわけです。助け合いと、そういう何かいろいろ問題がかぶさっている地域やゾーンの少子化、個人情報何とかなという時代に、どうゾーンで守るということを構築できますかね。

【竹村】 共同体、コミュニティ、なぜそういう共同体があるのかという、いろいろな説がありますがけれども、私は恐怖にかられた集団だと思うのです。コミュニティというのは、一番原点が、ある恐怖があってコミュニティを持っている。今はこの日本ではそんな恐怖はなくなって、そういうコミュニティをつくる外的な必然性がなくなっているという事だと思うのです。ですから私はコミュニティを子どもたちにトレーニングさせるためには、やはり恐怖を与えるべきだと思う。恐怖というのは何かというと、一番恐怖を勉強するのは自然の中なのです。彼らを自然の中に放り出すわけにはいかないで、やはり僕たちの生活の周辺で彼らが自然の中で小さな恐怖を与える。死ぬような恐怖じゃなくて、たとえば、ヒルにさされたり、カエルに飛びつかれたり、自然の中で味わって少しずつ体験をしていく、恐怖を味わう場所がなくなってきたのが、今の子どもたちです。全くコミュニティを消失しているというのは、そこに原因があるのだという考え方があります。ですから、先ほどのゾーンという話ですが、私はこれから地球温暖化で海面上昇してきて、例えば50センチ上がったら、50センチの堤防を上げればいいという事ではないんです。吹き上げ効果というのがありまして、小学校の庭に桜の花が落ちますね、その桜の花びらがビューって風に押し上げられて校庭の隅に積もって高くなるわけですが、その50センチ上げると堤防を2メートルから3メートル上げないといけなわけです。そうじゃなくて今ある堤防は絶対に壊れないようにして、それを乗り越えてきた波はあるゾーンでもう一回受けると。200メートル、300メートル、500メートル小さなゾーンで受けると。その間のエリアにいる人たちはどうするのかという問題があります。それは住んでいる人たちなら、畑村先生みたいな形で救助しなくてはいけないか